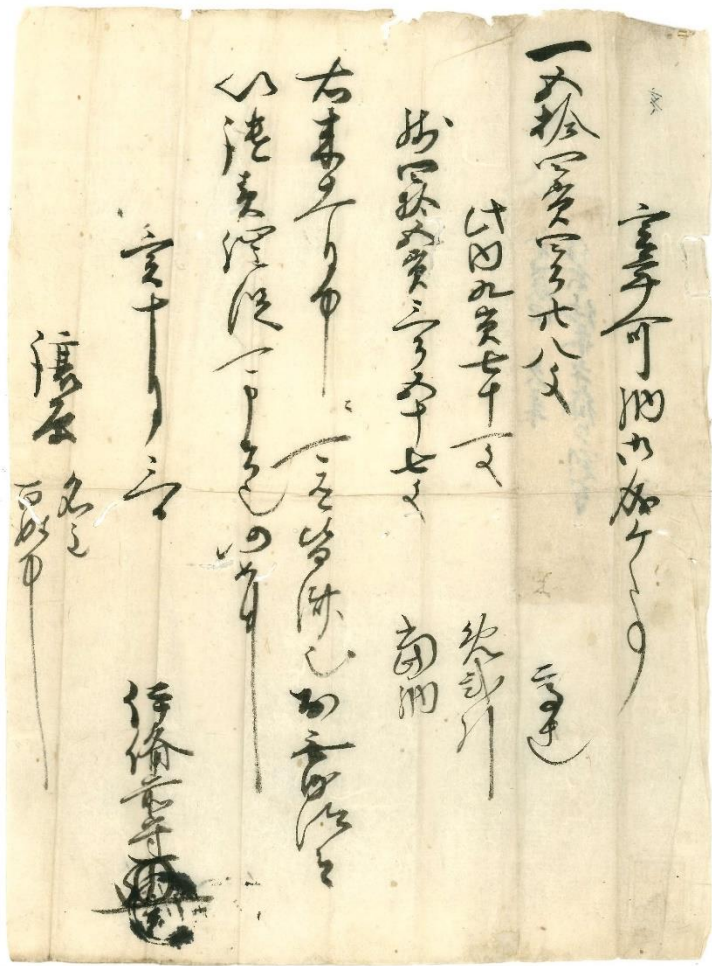


【5】亥年可納御成ケ之事 (慶長四年力・一五九九)

(藤岡市・山田家文書 P八二二七 No.二〇九三)



《釈文》

亥年可納御成ケ之事

一 五拾四貫四百廿八文

高辻

此内九貫七十一文

免式引

残四拾五貫三百五十七文

當納

右来十一月中、可有皆済一也、於無沙汰一者

以二譴責一催促可申者也、仍如レ件、

亥十月三日 伊備前守 (花押)

黒印

讓原 名主

百姓中

《読み下し》

亥年納むべき御成ケ (おなりか) の事

一 五拾四貫四百廿八文

高辻 (たかつじ)

此内九貫七十一文

免式引 (めんしきひき)

残り四拾五貫三百五十七文

當納 (とうおさめ)

右来十一月中に皆済あるべきなり、無沙汰に於いては

譴責 (けんせき) を以つて催促申すべき者なり、仍つて件のご

とし、

亥十月三日 伊備前守 (花押)

黒印

讓原 名主

百姓中

## 《用語》

【亥】慶長四年（西暦一五九九年）

【成ケ】取箇のこと。江戸時代、田畑の収穫物のうち幕府・領主の取り分。取ケとも書く。すなわち取前の意で、年貢・成箇・物成・取と同じ意味。ただし若干の使用法の相違があり、取箇は地租のみを称し（安藤博編『県治要略』）、田畑の石高に対する取前の意味として使われる場合が多い。【貫】錢を数える単位。一文錢千枚を一貫とする。江戸幕府は、寛永通宝（一文錢）を鑄造するようになってから、錢と金の比価を四貫文対一兩と公定した。

【高辻】年貢として納めるべき分米（ぶんまい）や石高の合計。

※地方凡例録（一七九四年）「右石高と云は、村高の事にて、〈略〉則村だか也、高辻と云も同じ事也、然ども高つぢと云は、一村中の高何ほどありと云時などには高つぢと云、田畑のたかを集めたる儀也」

【免式引】損免の割合。中世・近世、干害・虫害・風水害などの自然災害で農作物に被害を受けた田地について、調査・報告にもとづいて租税を減免すること（『日本国語大辞典』）。免式つ引は二割引き、吉ツ四分引は一、四割引き。

【當納】今年の年貢

【皆済（かいさい）】年貢を完納すること。かいせいともよむ。

【無沙汰（ぶさた）】処置や指図などをしないでおくこと。そのまま放っておくこと。

【謹責（けんせき）】厳しく責めること。責めうながすこと。督促。

【催促】早くするようにせかすこと。課役や借金の徴収をせまる。

【伊備前守】伊奈備前守忠次（一五五〇〜一六一〇年）。江戸時代前期の代官頭（関東郡代）。地方功者。諱は忠次、通称は熊蔵、備前守。

【譲原郷（村）】旧多野郡鬼石町譲原（現藤岡市譲原）。南境から東境を神流川が流れ、武蔵国児玉郡と境し、北は緑野郡鬼石村、西は同郡三波川村と接する。甘楽郡に属し、北部を十石街道が東西に走る。近世はおおむね幕府領。

## 《解説》

天正一八年（一五九〇）北条氏が滅亡すると、北条領国は徳川家康の領国となります。この結果、関東の山間地では永高制（土地に課せられる年貢の基準となる高を永楽錢で表示する方法）による検地（永高検地）が実施されました。上野国緑野郡では、文禄三年（一五九四）に代官頭大久保長安により譲原郷（村）で永高検地が行われており、三波川でも実施された可能性がります。そして慶長三年（一五九八）に代官頭伊奈忠次による検地が実施され譲原郷（村）では坪入帳（三波川村では地詰帳）が作成されました。この検地の結果、譲原郷（村）の高辻が決定され、年貢割付が行われるようになりました。

この史料（亥年可納御成ケ之事）は、譲原郷（村）に出された年貢割付の文書です。高辻（検地高辻）を五十四貫四二八文に定め、この内の二割に当たる九貫七一文を免除分として、残り四十五貫三五七文を当年の年貢高としました。そしてこの年貢は十月中に必ず皆済するように、もし何もしないなら謹責（厳しく叱り咎める）をもって催促することを名主・百姓中に伝えていきます。

伊奈忠次は、天正十八年（一五九〇）八月、徳川家康の関東入国後、武蔵国鴻巣・小室領一万石（または一万三千石）を給され、足立郡小室（埼玉県北足立郡伊奈町）に陣屋を構え、検地・知行割、利根川をはじめ河川の改修工事、新田開発、さらに寺社領、交通制度の諸政策に手腕を振るいました。彼の行った地方仕法は備前検地・備前堀・伊奈流と呼ばれ、のちの幕府の基本政策となっています。その支配領域は、関東地方から甲斐・伊豆・駿河・遠江・三河・尾張の東海地方に及び、徳川権力の政治・経済的基盤の拡充に重要な役割を果たしました（『国史大辞典』より）。

藤岡市譲原の山田松雄家文書には、江戸時代の年貢割付状が非常に良い状態で残されており、特に慶長・元和・寛永という江戸初期のものが多数残されているのは貴重です。近世初期の幕領の年貢を研究する上で、大いに参考になる史料です。

参考文献・佐藤孝之『近世山村地域史の研究』（吉川弘文館、二〇一三年）